

光と影の消去人（ディリ ーター）

K-西松

始まりの消去

プロローグ

月は高く昇り、世界に静寂が訪れる。

民家からは明かりが消え、街は暗闇に閉ざされた。

「神は言われた・・・人が墮落し、誇りを失い、依存するとき、それを正す必要がある、と。」

」

暗闇の中、灯る一つの明かり。教会である。

ここ、ディエルタ神聖国家は、エリ・メア教を国教としている。

国内のエリ・メア教信仰者は国民の90%を超え、政治、文化等で大きく影響している。

「光あるところに影があるように、人も同じである。」

薄暗い教会内の光源は、一本のろうそくの明かりと、窓から差し込む月の明かりのみ。

「汝、今、神の命を受け、咎人に裁きを与えよ。」

顔までは、はっきりと見えないが、声からして男だろうと思われる人物が一人と、その前にひざまずく人影が一つ。

一人は教会の牧師か何かであろう。

もう一人はローブをまとっている。

「エリ・メアの御加護を・・・。」

「・・・。」

牧師は懐から何かを取り出すと、ローブの人物に手渡した。

ローブの人物はそれを受け取ると、顔を埋める。

どうやら仮面のような。不気味なほど無表情な仮面。

ローブの人物は、仮面をつけ終わると、立ち上がる。

「エリ・メアの御加護を・・・。」

恐ろしく冷徹な声で、それだけ言い残すと、暗闇の中へと消えていった。

「ついに見つけた・・・。これをミシリア様に渡せば・・・。」

先ほどの教会から少し離れたところ、時計で言うとちょうど1時の位置にある教会内で、中年の男は作業をしていた。

作業といっても、教会に保管されている資料の盗難である。

「やはり、教会は利益目的で運営を？だが、それだと、あの行動の説明がつかない・・・詳しく調べる必要があるな・・・。」

男は立ち上がり、資料を鞆にしまう。

「奴らを外に待たせている以上、長引くとうるさいな・・・。」

男は、ふっ、と笑うと、扉に向かって歩き出した。

「なるほどね・・・。国王派も馬鹿じゃないようだな。」

皮肉めいた幼い声がした。

「誰だ!？」

中年男は声に反応し振り向いた。

が、しかしそこには誰もいない。

「いいところまで来ていたんだけどね……。」

中年男の真横を人が通り過ぎる気配がした。

「うわああ！」

男は腰の剣を抜くと、剣先をその気配の主、女にむける。

「女性に対してずいぶんと無礼な人ね……。」

「あなたが女性？笑わせるわね。」

またもや男の背後から妖艶な大人の女の声がした。

「くっ！」

あわてて背後を振り返るが、そこにあったのは変わらず闇だった。

(声だけで敵の姿が見えない……。外にいる仲間が、気がついてくれればいいが……。どのみち時間を稼ぐ以外に手はないな。逆にこいつらを捕縛できれば……。こいつらが噂の奴らか確かめることができる。そうすれば……。)

公式にはその存在は認められていないが、確実に存在する者。エリ・メア教団内部に存在し、教団内の反逆、他部署からの諜報活動、要人の暗殺等、教団に対してマイナスの影響を及ぼす者を消去する者達。

「ディリター……教皇の犬共か!？」

一瞬、周囲から異様な殺気がふくれあがる。

教団内には、狂信者と呼ばれる者達が多く存在する。

狂信者達は、教皇の命であれば、それは神の命として、なんでもやる。

例え自分の命を失うことであつたとしても、だ。

たぶん、ディリターも狂信者なのだろう、それが男の結論であつた。

「フフフフ。」

背筋が凍るような冷徹な笑い声。

明らかに一般人とは違う。

男はゆっくりと振り返り、天井付近の窓を見上げる。

「……アウリス・グラスマン聖騎軍諜報隊支部長殿。こんなところで何をやっているのかな？」

声の主は、月をバックに窓辺に座っていた。

ローブに身を包み、顔には仮面をつけている。そう、先ほどの不気味な無表情の仮面を。

「貴様は!？」

「私？私のことを知る意味があるのですかな？」

「そうそう……。」

また、幼さの残る女の声がする。

近くにいるのは確かだ。でも、姿を見ることが出来ない。

「エリ・メア教典を読んでないのかな？夜は出歩くべきにあらずって書いてあるはずだけど？」

」

最初の皮肉っぽい感じの男。

「貴様らが偽造した教典など、必要ない！聖教典をどこに隠した！」

「偽造？時代に合わせて作り直したのに……。」

(まだ、こないのか？これ以上、時間は稼げないぞ。)

「一つ言うことを忘れていた……。」

先ほどまで天井付近にいた男が、いつの間にか背後に立っている。

「お前が待っている仲間・・・もう存在していない・・・。」

「な・・・。」

「残念だったな・・・。」

「き・・・きさまあああああ！」

剣を振りかぶると、仮面の男にむけて振り下ろす。

耳をつんざくような金属音の後、男の剣が弾かれた。

「そんな・・・一体どこに武器が・・・？」

「後は任せた。」

『了解！』

「せいぜい、あとわずかな存在時間を大切にすんだな・・・。」

仮面の男は、それだけ言い残すと、振り返ることもなく扉から出て行った。

「お疲れ様です、ロイ様。」

扉の外にいた男がロイとよばれた仮面男に挨拶する。

「任務完了だ。」

「ですが、まだターゲットが・・・。」

ロイはローブのフードをとり、仮面を外す。

真ん中で分けられた黒色の髪、青い切れ長の瞳、月の光を反射するほどの白い肌。

ディリーターのトップ、ロイ・スティレットであった。

ロイは懐から眼鏡を取り出す。

「目標は、リオン、ヴェルノ、ヘーゲルにまかしてある。」

「はっ！」

「後は頼む。あいつらのことだ。かなり派手に散らかすからな・・・きれいにしておいてくれ。」

「了解しました。」

ロイは街の暗闇へと姿を消した。

その現場を見つめる視線があることに、気がつくことはなかった。

エルトとミシリア

ミシリアとエルト

その日から一週間経ったにもかかわらず、街では消息を絶った聖騎軍8人の話で持ちきりだった。

ある人は、神隠しや幽霊のせいといい、ある人は、愛人を作って蒸発したという。だが、一番有力な説は、存在を消された、だった。

「まだ手がかりすら見つからないのか……。」

赤い髪をポニーテールにまとめた女性がいらだたしげに吐き捨てた。

その女性は、ディエルタ聖国家聖騎軍の衣装を身につけ、2人の男をつれ、街の中を歩いている。

「姫にあわせる顔がないな……。」

ディエルタは、現在、エザリア・ラ・ディエルタ姫が王位を継承し、王位に就いている。

だが、国政の実権はエリ・メア教団が握っており、エザリアはあくまで象徴となっている。

それは、先王が遠征先で行方不明になったことが発端であった。

行方不明となったとき、エザリアはわずか10歳。とてもではないが、国を導くことができる年齢ではなかった。

そのため、エザリアが成人するまでの間、エリ・メア教団が国政を執り行うことにしたのである。

もともと国民の90%が信者なのだから、すんなりことが進んだ。

「ミシリア様、申し訳ありませんが……。」

長身で金色、女性がうらやましくなるようなさらさらストレートの長髪の男が、声をかけた。

「ベレトレ、もういい。どうせ何の情報もないんでしょ？ グラスマンの仇は必ず討つわ……。」

ベレトレは、自分の肩ほどしかない女に対し、頭を下げた。

ミシリア・エマ。若干23歳にして、王国派諜報員の隊長を務める。

彼女の髪は、彼女の気性を表すかの如く、赤く、瞳もそれと同じ色をしている。

ポニーテールにしているせいで、ふざけて赤馬、と馬鹿にされることもあったが、そういった輩は彼女の力によって病院送りにされたのだった。

「にしても、諜報員とはいえ、本当に容赦ないわね。」

彼女たちは、姫の命により、エリ・メア教団の不正を暴くため、日々諜報活動を続けている。姫を中心に活動するのが、王国派で、その中に、聖騎軍、諜報部がある。

それに対し、教皇エトフォル14世を中心に活動するのが、エリ・メア教団である。

エリ・メア教団は、世間では3つの部からなると言われている。

一つが、政治を執り行う執政部、通称クォレラ。

一つが、国王派の諜報部に対する諜報部、メトエレ。

そして最後の一つが、聖騎軍に対し、レリストエルデと呼ばれる教皇直属の軍隊を持つ。

この軍隊は、聖騎軍が姫の命でしか動かさないのと同様に、教皇の命でのみ動かせるのだ。

しばし、この二つの軍隊は衝突することがある。

「はたして、エリ・メア教団の諜報部、メトエレの仕業か、それとも教皇軍レリストエルデの

仕業か……。どちらにしろ、やっかいだな。あてはあるのかい？」

傭兵風の男が、ミシリアを見る。

「一応、周辺には聞き込みをしているが、たぶん無理だろうな。」

「夜は出歩くべからず、ってか……。やっかいな教えだな、ベルトレ。」

「オルベルティ、やはりこれも教団の狙いなのか？」

傭兵風の男はオルベルティとよばれ、30歳のおっさんである。

「おい、だれがおっさんだよ！」

「オルベルティ、誰と話しているんだ？」

ミシリアが大きな瞳をオルベルティにむける。

「いや、誰かにおっさんといわれた気がしてな……。気のせいだったようだ。」

黒の短髪に無精ひげをはやしている。

肌は日焼けして小麦色に焼け、いい風に言えば、夏男。

だが、たんなるおっさんである。

「おいこらあ！」

「オルベルティ……。私に向かって、おい、こらあ、だと？」

「あ……。いえ……。そんなつもりは……。」

「なら誰に向かっていったのだ？」

「え？それは……。」

「二人とも、その辺に……。この通りの裏通りに、レリストエルデが数人います。一人の男を囲んでいるようですね。」

ミシリアはオルベルティの胸ぐらをつかんでいた手を離す。

「いくぞ。」

足音を消し、ミシリア達は裏通りへと向かった。

エルトとミシリア

「あの、すみません。一週間くらい前の夜なんですけど、この人を見ませんでしたか？」

「知らないねえ……。夜は出歩くなって教えがあるしね……。」

「そうですか……。」

黒髪の青年、エルト・レットィは、一枚の写真を持って道行く人に尋ね歩いていた。

「この子か……。う～ん、見てないね……。」

「そうですか……。」

エルトは、6日前の朝、友人と会う約束をしていた。

だが、待ち合わせ時間になっても現れない。

寝坊かと思い、友人宅を訪ねてみるものの、友人はいない。

不思議に思いその日は帰ることにした。

その後、毎日友人宅を訪ねてみるが、全く帰った痕跡がない。

不思議に思って実家を尋ねるが、連絡がなくなったようだ。

「兄ちゃん……。」

「ん？」

エルトが振り返ると、一人のごく普通の男が立っていた。

「あまり大きな声では言えないが、その子なら一週間前、デルタ教会の前で奴らに……。」

「なんだって！？奴らってもしかして！？」

つい声を荒げてしまったが、周囲をさりげなく見回して、小声で話す。

「本当なのか？」

「ああ。見たんだ……。ちょうど家の前だったからな……。」

「それなら、王国派に発言してくれ。そうすれば……。」

男はしばし無言になり、考えていた。

「私自身、エリ・メア信仰者だ。それに、家族もいる。命は簡単にやれんよ。」

「だったら何で俺に声をかけたんだ？」

「あんたはあまりに目立ちすぎる。もっと考えて行動しなされ。若者がむやみに命を散らすのはすかん。それじゃあな。」

男はそれだけ言うと、立ち去ろうとした。

「おい、ちょっと待てよ！」

追いかけてしようとしたエルトの前に、レリストエルデ3人が現れた。

「何か用か？今忙しいんだよ。母さんが病気で、買い物を頼まれてるんだ。」

エルトは、レリストエルデの横を抜けて男を追いかけてしようとしたが、前をふさがれた。

「なんだよ、邪魔すんのか？どけよ！母さんの命がかかってんだぞ！？」

「貴様、なにやらかぎまわっているようだな？王国派か？」

「関係ないだろ！どけよ！」

「関係ある。1週間ほど前に、この近くで8人もの人間が消えているそうじゃないか。王国派の反抗との噂もある。話を聞かせてもらおうか？」

「はなせよ！」

両脇を抱えられ、エルトは、裏通りに連れて行かれた。

「貴様、何をやっていたのか、よ～く聞かせてもらおうか？」

「俺はただ頼まれた買い物でだな！」

黒のジーンズに白のカッターシャツ。白に金刺繍のコートを身にまとうエルトは、どこかの貴族とも思えるような服装である。

腰に、ブロードソードを下げ、ジーンズの横ポケットにショートソードが二本差し込まれている。

「いい加減なことを言うな！」

レリストエルデの一人が、エルトの胸ぐらをつかんで持ち上げる。

屈強なレリストエルデに対し、細身のエルト。軽々と持ち上げられ、足が地から離れた。

「く・く・くるしい・・・。」

「さっさと吐いた方が楽になるぜ？」

レリストエルデ達はへらへらと笑う。

「この・・・。」

エルトは、サイドポケットのショートソードに手をかけると、一気に引き抜く。

驚いたのか、レリストエルデは手を離す。

「ほう・・・。俺たちに剣を向けるってことは、貴様、王国派の人間でことだな？」

「教皇様に逆らう者には、罰を与えねばならない・・・。」

「なに言ってやがる！エリ・メアに逆らうならまだしも、教皇に逆らって何が悪い！」

エルトは、ショートソードを片手に構える。

「教皇様こそ！エリ・メアの生まれ変わりだ！」

「狂信者か・・・。まともに相手することの方が危ないな・・・。」

何とか逃げだそうとするが、すでに追い詰められた身。逃げ場どころか、動くスペースすらない。

「そこまでにしなさい！」

レリストエルデの背後から女の声がした。

「何だ？貴様ら・・・。」

「やる気か？そんな兄ちゃん一人に三人がかりでしか戦えないレリストエルデの雑魚が？」

オルベルティは、愛剣を片手に、嘲笑する。

「レリストエルデをなめるな！」

「まで。」

三人のうちの一人が止める。

「聖国家軍の衣服に赤い髪に瞳。ミシリア・エマか。」

「その通りだ。」

「ひくぞ。」

「ですが、イベルーサ様！」

「ここで戦う相手ではない。」

「はっ！」

レリストエルデは、ミシリアの横をすり抜け、逃げるように去っていった。

「よっ！さすが有名人！なっ、ベルトレ！」

「イベルーサ・・・。聞いたことのない名ですね・・・。まあ、レリストエルデの上の人間だったら、間違いなく命の取り合いになっていたはずですし、小物を見ていいでしょう。」

ベルトレは、ノートに何かを書き込むと、ポケットにしまった。

「いい加減、その武器しまったら？敵意はないつもりだけど？」

自分が武器を持っていたことすら忘れていたエルトが、あわててショートソードをしまう。

「あ、ありがとうございました。」

「気にすんなよ！にしても、腰にでっかい獲物があるのに、そんなちゃちな武器使うのかよ？まして、そんな腰引けてたら、素人って丸わかりだつづの。」

オルベルティが、エルトをじろじろと見る。

「うっ・・・うう・・・。」

何も言い返すことなく押し黙るエルトに、ミシリアは優しくほほえみかける。

「怪我はない？」

「え、ああ・・・大丈夫。なんともない。」

こんな綺麗な赤い瞳に見つめられたら、世の大半の男は落ちることだろう。

「どうかしたの？あいつらに絡まれるなんて。」

「あんたら聖騎軍だよな？こいつ知らないか？一週間前から消息が途絶えているんだ。俺の友達なんだ。」

エルトはそうやって写真を見せる。

「この子は・・・。」

写真には、明るいさわやかな青年がうつっていた。

「グラスマン隊にいた子ね・・・。私たちもこの子達を探しているのよ。」

「知っているのか！？」

「ええ。」

「どこにいるんだ？生きてるのか？死んでるのか？」

「・・・わからない・・・。」

「え？」

「わからないわ。何も、ね。」

「そんな・・・。」

エルトは拳を強く握りしめる。

「あいつらのせいなのかよ・・・。」

「あいつら？」

「ディリーターだよ！あいつらが消したのかよ！」

「・・・。」

ミシリアは、うつむいた。

何もできない自分、助けられなかった自分。自分には力がない、ディリーターを追えば追うほど、奴らの力を見せつけられる。

「とにかく、剣も振るえない坊やは、あまり目立つ行動するなってことだ。」

「くっ・・・。」

「ごめんなさい。オルベルティも悪気があっていったわけではないの。」

「わかってる。実際に弱いのは俺だから。ただ・・・。」

「ただ？」

「ただ、悔しいだけだ！」

(この子も同じなのね・・・。)

「名前を聞いていなかったわね。」

「俺か？俺はエルト・レットィだ。」

「そう・・・。私はミシリア・エマよ。」

「ミシリア！？あんたがあのミシリアか！？」

「あのっていわれてもわからないけど・・・。」

「だって、王国派の中じゃ噂の人だもん。美人で頭脳明晰、あげくに武術もできるとなれば、憧れの的だろ？」

「いえ、それほどでもないですよ。」

「いいや！死んだ親父が、ミシリアはすごいぞって言ってたからな！」

「お父さん、なくなられたんですか・・・。」

エルトは、ミシリアから視線をそらし、空を見上げた。

「俺の親父、消されたんだよ・・・。」

「・・・。」

「仕事で帰りが遅くなって、その日の朝にはもういなかった・・・。夜に何か見たんだろうって。」

「ディリーターに消された、か。」

オルベルティは無精ひげをなぜながら、ため息混じりにつぶやいた。

「このブロードソードが親父の形見なんだ。俺には重すぎて、ちょっとしたことにしか使えないんだけどね。」

「そう・・・。」

「おい。」

オルベルティがエルトの肩をたたく。

「オルベルティ！勝手な行動は、認められませんよ？」

「うるさいな・・・。ベレトレ、あいかわらずお前は細かいな～。」

「二人とも！」

ミシリアの一括で二人はおとなしくなる。

「なんて言ってもいいかわからないけど、できる限りのことはするわ。」

まっすぐなミシリアの瞳を見て、エルトは心を決めた。

「一つ聞いていいか？」

「なにかしら？」

「1週間前、俺の友人はデルタ教会に行かなかった？」

「・・・その通りよ。なぜ知っているの？」

「いや・・・。夜、外にいたら教会の前に人がいたからさ。」

「そうなの・・・。」

エルトは、ミシリア達に背を向ける。

「助けてくれてありがと。んじゃな！」

「おいおい！せっかく俺が鍛えてやろうと思ったのによ。」

「ありがとな、おっさん！でも、俺だってああいう形じゃなきゃ、結構やるんだぜ？」

「誰がおっさんだ！」

「あははは！またな～。」

エルトは大きく手を振ると、走り出した。

さっきの親父を捜しに。

(あの親父は、現場を見ている。あいつを見つけ出さなきゃ。)

エルトの後ろ姿を見送りながら、ミシリアは手を振っていた。

「隊長、よかったんですか？隊長の好みのタイプだった気がするんですけど？」

「えっ!？」

ミシリアの顔が髪の色と同じ色に染まる。

「やれやれ・・・天下のミシリア様も、恋には勝てぬか。」

「そ・・・そんなことはない！」

「はいはい。」

「ベレトレ。」

「わかっています。」

優雅に会釈すると、ベレトレは人混みの中に消えた。

「尾行ですか？」

「ええ。彼は何か知っている。」

「まさかと思うが、メトエレの可能性は？」

「仮にもし、メトエレだとすれば、レリストエルデともめる原因がない。彼は純粹に何かを知っている。今は、教皇派とかは関係ないです。教皇派とわかれば・・・。」

「俺の出番ってことですね？」

「ええ。一度、本部に戻ろう。」

「了解！」

ミシリアとオルベルティは城に向かって歩き出した。